笑いの声はとうとうたらり

笠原出さんが笑顔を作品に用いるようになったきっかけは、学生時代に石垣島で「アンガマ」に出会ったことであったという。あの世から招かれた翁（ウシュマイ）と媼（ンミー）が木の面をつけて町や村の家々を訪ね歩く、八重山地方の島々に伝わる盆の祭りである。このアンガマは、折口信夫が芸能における「翁」概念の起源の着想を得た行事として特に名高い。

> 此中心になる大主前（ウシュメイ）と言はれる老夫［…］が時々立つて、訓戒・教導・祝福などを述べるのであります。其間に、眷属どもの芸尽しがあります。此からしても、内地の古記録から考へられる常世のまれびとの元の姿はやゝ、明るくなつて来ます。［…］祖霊を一体の長者の大主（ウフヌシ）とし、眷属の霊を一行としたものです。さうして今は、其本処の考へを忘れてゐますが、他界の聖地から来たものに違ひありません。親雲上（ペイチン）（引用者註：家長のこと）は、其等の群行から、正面に祝福を受ける人として、予め一行を待つ形が変つたのでせう。其に、儀来（ニライ）の大主（ウフヌシ）を加へたのは、長者大主一行の本義の忘れられた為、更に祝福の神を考へ出したのです。［…］祖霊の、異形身と畏怖の情とが、其まれびととの関係を忘れた世に残れば、単に、祝福と懲罰と授戒との為に来る巨人を、考へる様になる筈です。此が、聖化し、倫理化して考へられると、にらいかないの神となるのです。
>
> 折口信夫「翁の発生」初出 1928 年
>
> 青空文庫 https://www.aozora.gr.jp/cards/000933/files/18406_14349.html

折口は、この翁＝「常世」としての異界から祝福にやって来る来訪神に象徴されるものこそ「まれびと」であるとして論を展開し、沖縄の他界概念であるニライカナイと関連づけて日本人の神や鬼の観念や文学・芸能の発生について論を構築していく。つまり折口の理論の基盤に、アンガマから得たアイディアがあったのだった。それほど原初的な、なまの想像力の形を見たということだ。

それから一世紀近くが経って、学生時代の笠原さんが思いがけず同じ祭りから霊感を得ることになったわけだが、笠原さんは民俗文化のシステムではなく木の面にこそ惹きつけられた。この不気味な笑みは一体何か。おもしろいのは、笠原さんがこの笑顔をいわゆる「キャラ」に読み替えたことだ。じっさいキャラクターとはある表情（性格）を限定的に与えられた象徴のことにちがいない。そしてその表情のほとんどが笑顔であることは周知のとおりだ。たとえばおもちゃ売り場に行けば、無数の精霊が、盆に限らずぼくらを祝福している。

人どうしが笑い笑われるのでなく、個人の内から笑いがこみ上げるのでもなく、あくまで笑いは異界からやって来る――そこに笠原さん独自の、通常の理解とは異なる笑いの解釈がある。作品において独立したキャラとして表されていた笑顔はいま、文字通り浮遊する霊として画面を覆い、憑依している。笠原さんは作品を以てぼくらを笑わそうとするのではない。ただ作品が――異界に属す場所が――笑うことのみがかれの望みだ。作品が異界に属すなどと書けばオカルトめくけれど、美術の制作に携わる者なら誰もが当然のように了解するはずだ。能の「翁」は、「とうとうたらりたらりら たらりあがり らららりどう」という意味不明な謡で幕を開ける。ナンセンスな響きそのものがまったき未知の世界からやって来るように、作品は作者にとってさえ他者である、あるいはまれびとである。

笠原さんは、作品を笑わせようとしている。少なくともかれはそれを求めてもう 30 年近くも笑顔を降ろし続けている。これほど不気味でゆかいで素晴らしいこともない。

成相肇（なりあい・はじめ）／東京国立近代美術館主任研究員